連載
わたしたちの地域創生――⑭茨城県行方市（なめかた）

消費者の知恵で原発事故から立ち上がる

茨城アイガモ水田トラスト

初体験の人も一列に並んで一斉に稲を植える

田植えから1週間で稲が根を張った田んぼにコガモを放つ

ほのぼのとした合鴨農法

「テレビの『クレヨンしんちゃん』に出てくる田植えって何？って子どもに聞かれて連れてきました」という若い夫婦。「この小さいイチゴは食べられるの？」と畔の蛇イチゴを恐る恐る触ってみる子どもたち。茨城アイガモ水田トラストは、都会の家族が田舎を体験する絶好の機会を提供しています。

食べものは自ら作らねば

世話人の平野清子さんが活動を始めたのは、遺伝子組み換え食品に稲まで登場したのを知ったことがきっかけでした。もともと家業の関係で、10代の頃から飼料の品質管理に携わっていました。

「退屈なルーチーンワークの中で、安全な飼料による健全な畜産物が人々の健康を守る。そのための大切な仕事なのだと自分に言いきかせながらがんばってきた」と言います。また検査の過程で、人間の食物のほうが家畜の食物より劣るのではないかと思うことも度々あったそうです。

様々な食の問題を通して、環境の大切さやそれを脅かす動きがあることも痛感しました。「食べ物は、やっぱり自分で作らねばだめだ」との思いが募り、消費者が出資して生産にも関わりながら収穫を分配するトラスト運動にたどり着きます。2001年に茨城県常北町の合鴨農法に出会い、以来、場所を変えながらも茨城県内で続けてきました。

合鴨農法の良さは、合鴨の雛が稲にとっての害虫や雑草を食べてくれるので、農薬や化学肥料を撒かずに済むことです。合鴨は稲の葉を好まないため、稲自体を損なうことがありません。何より水田に黄色い合鴨が群れて泳ぐ姿は、水田を共有する人たちをほのぼのと温かい気持ちにさせてくれます。

原発事故と闘う「笑鴨（わらいかも）」

土と平和の祭典など催し物で知り合った人々を巻き込み、10年が経った2011年。福島原発事故により、合鴨のいる水田にも放射能が降り注ぎました。茨城県も数々の野菜が出荷停止になり、出荷停止措置はなかった米にも打撃が及びます。提携先である行方市の米専業農家、田宮満さんは、「放射能の検査結果が基準値以下でも、直売していた80%の消費者が契約を打ち切ってきた」と言います。安全な食に関心のある消費者が顧客であり、情報が正しく伝わりにくい状況では、無理からぬことでした。茨城アイガモ水田トラストでも、独自に検査した結果は、検出限界1ベクレル／キログラムでセシウム不検出。しかし、約50件の契約者のうち3割が減ってしまいました。

「このままでは、消費者に寄り添ってくれる有機農家が無くなってしまう。まっとうな食と環境を何としても次の世代に残さねば」。危機感を持った世話人たちは、事故後に前年産の合鴨米（放射能汚染の無い米）まで返品になった事実を知り、知人に声をかけて買い支えました。原発事故の風評被害で行く場を失った合鴨米を活かすため、純米酒の製作を思い立ち、『笑鴨』というネーミングもトラスト仲間で公募しました。8年前から夫婦で参加するデザイナーの成冨聡子さんなどが、手弁当でパッケージ製作に携わりました。

合鴨農法に無駄はない

5月の田植えから案山子作り、稲刈り、しめ飾り作りと1年を通じて、消費者が生産に関わります。大きくなった合鴨は絞めて命を頂きますが、中にはペットとして飼うため生きたまま受け取る人もいます。合鴨農法に無駄なものはありません。その循環に人間も組み込まれていることを実感させてくれます。16代め農家の田宮さんには17代めが誕生しました。公務員だった息子さんが、専業農家として後を継ぐことを決めたのです。「ばかな息子だって皆から言われますよ」とうれしそうです。持続可能な地域づくりに希望の光が差しています。　（まとめ　杉浦陽子）

●茨城アイガモ水田トラスト

合鴨農法の水田6反歩（1800坪）を1口30坪として消費者が1年間オーナーとなるしくみ。1口2万6000円。問い合わせは、電話：090-1432-9295（平野）